

援助職のリカバリ

《19》

～「生活能力」と「愛情」と「感謝」～

袴田 洋子

今年の6月、3度目の開業をして、自分の事務所で仕事を始めました。開業して3ヶ月目で、事務所を手伝ってくれる人が2人も来てくれて、賑やかに仕事をしています。こんな時が来るとは、思ってもみませんでした。本当にありがたいことです。私の事務所で、仲間と仕事をしている。私が思うように、望むように、やりたいように、一人ではなく、思いが同じ仲間と一緒に仕事をしている。夢のようです。ここまで来るのに、遠回りをして遠回りをして、ようやくたどり着きました。地域に根差した役に立つ相談業務ができるように、仲間と共にやっていきたいです。

《残るは、「我が家」の課題》

幸せを感じる職場で働けて、嬉しくて仕方がないのですが、浮かれて失敗をしやすい時期だなあとも思っており

ます。もともと器用ではないので（本当のもともとは、けっこう器用な方かと自分で思っていた時期もあるのですが、ある時、自分を客観視したときに、「自分は不器用な人間だ」と自覚）、自分が浮かれて幸福感という「感情」に浸っていると、利用者さんの「辛さ」「痛み」に対する想像が不十分になり、イケテナイコミュニケーションをしてしまうような気がしています。どうにも不器用です。この不器用が原因なのかわかりませんが、前回の記事で書いた「夫婦関係」について、なんだかまだ、くすぶっているものがあるように感じます。

《「家事」って、すごい仕事 orz》

私は、看護大学を卒業し、結婚したのちも、医療であれ、福祉であれ、働いていることが「通常」でした。夫婦ともにフルタイムで働いている場合、

「家事」というのは、本当にやっかいなものになります。「仕事」は、やるべきことをやり、課題や目標が明確、あるいは、言われたことをやればそれでよい、というものだったり、「今はこれをすればいい」とピンポイントで優先順位をつけることが可能なものだと思います。これに対して、「家事」は、キリがありません。「自宅」を居心地のよい空間にするために、掃除、洗濯、片付け、整理、ゴミ捨て、などなど、際限がないのです。ある時、男性の利用者さんと、「娘さんが仕事に出るようになったら、家事はどうしようね、掃除とか、洗濯とか、あ、ゴミ捨て、どうしようね」とあれやこれや「生活」の中に出てくることを話していたら、利用者さんが「いやー、生活するって大変だね、仕事してる方がよっぽど楽だね」と言いました。まさにそのとおりで、私にしてみても、「家事」より、「仕事」の方が、よっぽど楽なのです。これに「子育て」が入るといえるのは、すごいことです。とある本で読んだ記憶ですが、「日本では、スーパーウーマンしか、働きながら子育てなんてできない」とありました。そう考えると、看護師なんかより、ヘルパーさんの方が、断然にすごい職業だと思います。自分の家事能力を武器に仕事をしているのですから。

《「片付けられない夫」》

そういう我が家は、本当にイケテナイとちょっと個人的には思っていて、なんとかキレイにしたいのですが、夫が恐ろしいほどに、無頓着です。掃除機をかけてくれたかと思えば、寝室はやっていない、クローゼットの扉は開けっぱなし、使った布団は出しっぱなし、どこの小学生かと思うほどです。男性ってこんなにも片付けない人間なんでしょうか。「片付けられない夫」でネット検索すると、出るわ出るわ、すごい量です。

我が家では、猫を飼っているので、猫の抜け毛が部屋に舞っており、これに対処するには、毎日掃除機をかけるしかありません。お掃除ロボットのルンバが世に出た時、我が家の救世主はこれだー！！と早速購入しました。が、あれは、部屋が片付いていないと、役に立たないのです。お掃除ロボットの前に、お片づけロボットが必要な状態の家では、さらなる邪魔なモノになってしまいました。

《どうしたら夫に「感謝」できる？》

「片付けられない女」という言葉が広まってきて、聞くたびに、自分のことかもなあと思っていました。自己肯定感がマイナスだった頃、仕事も私生活も「最低限」で乗り切ることしかできず、生活の「彩り」を考えることな

どできませんでした。そんな自分が断捨離をして、今の自分に要らないものを捨て、医学モデルの「自分探し（死語ですか？（笑））」を手放して、「日々の暮らしを居心地よいものにする」ことに、ようやく着手できるようになってきたと思うところで、「夫」が立ちはだかります。片付けない夫が、ゴジラのように襲ってくるわけです。

と表現する自分は、なぜ、夫に優しくできないのだろうと思い、自分を責めてしまいます。他人には優しくできるのに、夫には優しくできない。こんな話をすると、「みんな、そんなものだ」とよく聞きます。「離婚しないのは、経済的にやっていけないからよ」とも大変によく聞きます。大学院でお世話になっている先生からは、「夫婦で一緒に出来ることをやらないとダメだ。旅行とか、互いに時間を作って、一緒にやることをしなさい」といつも私に言います。40代も終わりに近づいて、来年は50歳になるところで、熟年離婚が他人事ではないように感じることも多いです。団先生の言う「家族でいるには、努力が要る」が、身にしみる日々です。夫への感謝が足りないのだろうと思いますが、感謝って、「感謝しなくちゃ」と思って出てくる感情なのか、そのあたりで、また自分を責めるわけです。

「感謝 足りない」というキーワードでネット検索したところ、「ありがとう、が日常から減っていくと、感謝より欲の方が大きくなる」と出て来ました。なるほど、思い当たる節があります。

自分が、今、こうしてられるのも多くの人の支えや励ましがあったからです。多くの人には、もちろん夫も入るはずですが、なぜ、「家族」には、感謝の気持ちが、薄くなってしまっているのでしょうか。「生活を営む」というのは、きっと、世の中で考えられている以上に、ものすごく大変なことなのだろうと思います。